

竹生島

長唄

全詞章

本名題「今様竹生島」

能「竹生島」に取材

資料の題名『竹生嶋』

竹に生るる鶯の、竹に生るる鶯の、竹生島詣急がん

是は竹生島参詣の者にて候、扱も神霊あらたにましまして、島のわたりもいと易く、誓の船に乗りて候

〔本調子〕 弥生半の海の面、霞わたれる朝ぼらけ、長閑に通ふ船の路、うき業となき心かな

此の浦里に住みなれて、明けくればこぶうろくづの、数をつくすや釣人の、誓の船に法の道比良の根風吹とても、沖漕ぐ船はよもつきじ、旅の習のおもはずも、雲井のよそに見し人も、同じ小船になれ衣

あれ竹生島も見えたりや

船が着きて候、御上り候へ

不思議やな、此の島は女人禁制と承り候に、あれなる女人は何とて参られ候ぞ

それは知らぬ人の申す事にて候

忝くも此の島は、九生如来の御再誕、そりや言はいでも住の江の、松のひじやうも妹と

背の、そのあひ中はあるものを、弁財天は女体にて、結ぶ縁の糸竹に、道も守りて新たなる、

天女と現じましますば、女子に隔てなみならぬ、深き心の願事も、利生は更におこたらず

何の疑ひ荒磯の、島松影のあま小舟、乙女の姿忽に社壇の扉へ入るとよ見えしが、又釣人も

立帰り、波間に入らせ給ひけり

実に実にかかる有様に、信ずる心弥勝る、神の示現を松のかげ

御殿頻に鳴動して、光り輝く日月の、山の端出る如くにて、現れ給ふぞ忝なき

抑々是は此の島に住んで臣を敬ひ、国を守る弁財天とは我が事なり

虚空は音楽数々の、花降り下る春の夜の、月に輝く乙女の袂、かへすかへすも面白や

夜遊の舞樂も時過ぎて、夜遊の舞樂も時過ぎて、月澄み渡る海づらに、波風頻に鳴動して、

下界の龍神あらはれたり

龍神湖上に出現して、龍神湖上に出現して

光も輝く金銀珠玉、彼のまれ人に捧ぐるけしき、有難かりける奇特かな、有難かりける

奇特かな